



地デジカ情報号



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 231号 2011.1.8 発行 社会政策研究所

=====

NTTエムイー、非課税世帯に地デジ簡易チューナーを給付

朝日新聞 2011年1月6日

NTTエムイー（東京都豊島区、大木一夫社長、03・3985・2121）は、市町村民税の非課税措置を受けている世帯を対象に、簡易地上デジタル（地デジ）チューナーの無償給付を行う。総務省の受信機器購入等支援事業の一環で、24日から申し込みを受け付ける。7月24日の地デジ完全移行まで約半年となり、未対応世帯への支援を加速させる。

世帯全員が収入面などの理由から市町村民税非課税の措置を受けている世帯を対象とする。現在利用しているアナログテレビで地デジが視聴できる簡易チューナーを無償で給付する。チューナーの設置や操作方法がわからない場合に備え、電話によるサポートも用意する。加えて、NHKの放送受信料全額免除世帯に対しては、チューナーの無償給付に加え屋外アンテナの無償改修なども行う。

地デジがやってきた 現場の周辺<上> メーク、美術の苦闘（再掲）

東京新聞 2011年1月4日

ブラシでファンデーションを薄く載せるヘアメイクアーティストの岡元美也子さん = 東京・西五反田で



今年七月二十四日、テレビ放送がアナログからデジタルへ完全移行する。地上デジタル放送（地デジ）によって、高画質、データ放送などを売りにした「地デジ時代」が本格的にやってくる。そこで、地デジの現場周辺をあらためて取材し、テレビ界の変化を探るとともに、“アナログ派”にもその心を聞き、さらには将来のテレビ像にも迫ってみたい。

「あの人、老けたね」「あ、あんなにシワがある」なんて、テレビを見ながら話す機会が増えた。デジタル放送はアナログ放送と比べて、高画質のハイビジョンが楽しめる。それだけに制作側は対応に苦闘する。

▼“自然に隠す”

「最近ごまかしがきかなくて困ってます。若い女優さんのアップから自分のアップに画面が切り替わると、がくぜん。本当に嫌になる」。ベテラン女優の音無美紀子は嘆く。

「ハイビジョンは肉眼では見えない、きめの細かさや毛穴など、肌の質感まで映す」と話す、資生堂のヘアメイクアーティスト・岡元美也子さん。自社のテレビCMで女優らのメイクを担当してきた。

ハイビジョンは約二百万画素。約三十五万画素のアナログ放送（標準画質）と比べ、より鮮明に映る。

かといって厚塗りをすれば化粧をしない首との差が際立つ。そこで編み出されたのが「気になる部分を隠しつつ、素肌感を生かす」という高難度のナチュラルメイク。

鍵となったアイテムがファンデーション。色の主流は健康的に見えると多用された赤み系から、素肌に近いベージュ系に変わった。メイク法も様変わり。「スポンジや指を使って覆い隠すように塗る方法から、ブラシで薄く丁寧に、こまめに重ねづけするようになった」メイクと連動して重要性が増したのが、照明や撮影だ。「間接照明を多くし、光の質をよりやわらかくするようにしている。直線的な光だと、鼻の影やほうれい線がシャープに出てしまうから」(東映京都撮影所の今西均カメラマン)

▼半かつら

時代劇の現場はさらに細心だ。「現代劇よりも隠すモノが山ほどある」と、「水戸黄門」(TBS)などを手掛ける撮影所でヘアメイクを担当する山下みどりさん。最も難しいのが、かつらの生え際“のりしろ”部分の「アミ」。網目を細かくしたものの、アミを隠すには昔のドーランで塗りつぶすしかなく、厚塗りになってしまうため、「アミ自体を減らしていかないと...」。前髪や生え際に俳優の地毛を生かすようにした「半かつら」が増えている。頭頂部を半月形にそった「月代(さかやき)」の場合も「あらかじめ髪をそる役者さんが多くなった」。

▼小道具の新聞も手作り

リアルな質感が求められるのはセットや小道具を作る美術も同じ。同撮影所では今、美術品の真贋(しんがん)をめぐる財前直見主演のサスペンスドラマ「フェイク 京都美術事件絵巻」(4日から火曜夜10時、NHK総合)を、東映とNHKが共同制作している。「京都府警三条署」のセットの窓枠にも工夫の跡が。「木枠で窓枠を製作しているので、古くさく見えないように金属製の樹脂シートを木枠に張って金属製の窓枠のようにしている。昔なら色を塗るだけでOKだったけど」と、NHK大阪放送局の美術デザイナー・西村薫さん。

撮影所の竹村寧人(やすと)・美術課長は、ハイビジョン対策の秘密道具があるという。仲間内で「べっぴんさん」と呼ぶ薄い板で、色を塗ってセットに張って質感を高めたり、柱のくぎ穴を隠したりするときなどに使う。時代劇は武家屋敷などの常設セットを作品ごとにアレンジして撮影するのが普通で、あちこちに傷やくぎ穴がある。以前は単にベニヤ板で隠すだけだったが「べっぴんさん」を思いだした。

「すべてにピントが当たる感じ。二倍の手間暇をかけるようになった気がする」。一例が新聞。アップで使われる場合でも、以前は見出しだけを作り、記事は新聞から適当に切り張りしていたが、「見出しと合わない内容だとバレたら困るので今は記事も作ってます」。

画面の縦横比がアナログの三対四からデジタルの九対十六へと横長になった影響も大きい。「(奉行所の)お白州のシーンだと、昔なら正面だけのセットで済んだけど、脇の部分も作るようになった」

時代劇のロケで映り込んだ電信柱などはコンピューターグラフィックス(CG)で簡単に消せるようになったが、役者の深い心情を表現するにはシワの一つにも妥協できない。「デジタルって言っても結局考えるのは人なんですよね」(竹村さん)。「魂」を吹き込む制作者のこだわりは不変だ。(服部聡子)

地デジがやってきた 現場の周辺<中> データ放送、双方向

東京新聞 2011年1月6日

テレビの未来は、デジタル放送のメリットをいかに取り入れるかにかかっている。知恵を絞るテレビ各局の取り組みは -。

▼テレビ版マイレージ

データ放送はリモコンのボタン操作で情報が得られるサービス。ニュースや天気などがいつでも見られる「独立型」と、放送中の番組の関連情報が楽しめる「連動型」の二種類がある。

最近、多様性に富んできたのが「連動型」。漫画家を目指す少年が主人公のアニメ「バクマン。」(NHK教育)もその一つ。インターネットに接続したテレビで見終わると「アニメマイルがたまりました!!」の表示が出る。リモコンの青ボタンを押すと累積視聴時間が「記帳」される。

視聴時間に応じてポイントがたまると、壁紙や声優の動画などの特典を獲得できるのが「テレビ版マイレージ」。事前登録でワンセグ視聴での記帳も可能だ。小中高生を中心に参加者は三万人を数える。

マイレージ形式のほか、ゲーム形式もあり、導入される番組がここ数年増えた。

一方の「独立型」もバージョンアップ。NHKは昨年二月のバンクーバー冬季五輪で刻々と変わる放送予定時間をリアルタイムでほぼ表示した。五輪中継史上初の取り組みだった。また同年十月のフィギュアスケートNHK杯の中継では、終了済み競技のダイジェスト動画も、データ放送の画面で同時視聴できるようにした。

▼マルチ編成が威力

一つのチャンネルで二、三の番組を同時に放送できるマルチ編成は、スポーツ中継の延長放送に威力を発揮する。

名古屋のCBCは、優勝争いで注目された昨年九月九日夜の阪神×中日戦と横浜×巨人戦の二試合を全国で初めてマルチ編成で同時生中継した。両試合を合わせた平均視聴率は14・1%(名古屋地区、ビデオリサーチ調べ)で、昨季の同地区の中日戦中継の平均視聴率10・8%を上回った。CS放送が人気とはいえ、「地域密着型」のプロ野球中継はローカル局にとって魅力的なコンテンツとなっている。スポーツとバラエティー番組のマルチ編成というケースもあり、積極姿勢を見せる局もある。

▼注目が集まる双方向

リモコンの色ボタンで選択して、クイズの解答やアンケート投票に参加するのが双方向機能。

「ここ十年ほど一番組あたりの参加数は三千~一万件で推移してきた。認知度が低かったのか、思うように伸びなかった」とNHK編成局デジタルサービス部の辻俊一副部長。レギュラー番組のうち双方向番組は「あさイチ」だけ。だが「昨夏以降、デジタルテレビの急速な広まりで増加に転じている」としている。

番組に双方向をダイレクトに生かす動きも出てきた。視聴者が居住地の空模様をリモコンのボタン操作などで送信した回答を集計して天気図をつくる「ソラをライブ」。ウェザーニューズ社が開発したシステムを使って、大阪の朝日放送が昨年三月末に朝の情報番組内で放送を開始。テレビ朝日にも広がった。

▼視聴者参加のドラマ

そして地デジ完全移行の年を迎えた新春二日深夜には、視聴者投票で結末が変わる世界初のドラマ「ザ・ミュージックショウ」(日本テレビ)が放送された。架空のオーディション番組を舞台に、弁当店を営む中年女性の遠山景子(戸田恵子)と父親を捜す若い女性の山崎薫(桐谷美玲)が歌手デビューをかけて対決する内容だった。

放送当日、ディレクターらは副調整室に待機。終盤の視聴者投票では約五万の投票があり、山崎が51%の得票率で遠山を僅差で上回った。その結果を受けて、あらかじめ収録した二通りの結末のうち山崎が歌う内容だけを放送した。

日テレの戸田一也プロデューサーは「予定調和の世界に視聴者が結末を選べるライブ感を吹き込んで新しいドラマを提案した」と挑戦の意図を語る。

企画・原案の森谷雄さん(制作会社「アットムービー」)はテレビ界の現状について「地デジになったらこれだけ面白くなるんだと提示しきれていないのでは」と指摘した上でこう語る。「一般の人たちがネットでどんどん意見を発信する時代。その点、放送は遅れているが双方向で一気に取り返せる。このドラマの続編をぜひつくりたい」。一方通行だったテレビの視聴スタイルが変わる日が来るかもしれない。(服部聡子)

地デジがやってきた 現場の周辺<下> アナログ魂

東京新聞 2011年1月7日

地デジ完全移行に象徴されるようにデジタルの大波が寄せ来る時代だが、旧来のアナログな手法を続ける人もいる。その「こころ」は-。(山岸利行)

▼ 永六輔 大事なものがなくすの怖い

「勝手にデジタル化を進めるのは暴力的。どこかでお年寄りが暴動を起こさないのかと思う。でも、今の日本人は怒らなくなってるから」と複雑な表情を見せる永六輔。携帯電話もパソコンも使わない“アナログ人間”だ。

「ドレミの音階は、言ってみればデジタル。で、『ド』と『レ』の間の音階がアナログ。三味線なんかはその間の音が出せる」

「ド」か「レ」でなく、その中間があつていい。転じて、きれいに揃(そろ)ったものばかりでなく、不揃いのもがいろいろあつていいという。「人間が一人ずつ違う、その良さです」

永が出演するラジオの長寿番組は、はがきや手紙が基本。「メールは移動中でも打てるけど、手紙は集中しないと書けない。手紙にはその人それぞれの生活が送られてくる。筆を洗って、机に向かって、時間を割いて...。そういうものこそ大事にしたい」

デジタル画面もきれいに見えるけど自然の色じゃない、と厳しい見方をするが、敵視しているわけではない。

「今年、青森から鹿児島まで新幹線でつながりますね。それはそれでいいけど、SLも時に走ることがある。ならば、テレビもデジタルだけでなく、アナログも残してほしい。合理化、スピード優先のあまり、気がついたら大事なものがなくなっていたというのが怖い」

デジタルのほうが使い勝手がいいという人が多いであろう現代、永にとっては「アナログのほうが居心地がいい」。「僕の体験を僕の言葉で伝えていきたい」という当たり前のコミュニケーション。これが永の“アナログ魂”だ。

えいろくすけ 1933年生まれ。ラジオパーソナリティーのほか、「こんにちは赤ちゃん」「上を向いて歩こう」などの作詞でも知られる。1994年に出版した「大往生」はベストセラーに。現在、TBSラジオ「土曜ワイドラジオTOKYO 永六輔その新世界」「永六輔の誰かとどこかで」などに出演中。

▼ さだまさし 人の体温伝えるのに必要

二〇一一年の年明け直後、名古屋市のセンチュリーホールで、NHK「今夜も生でさだまさし」の新春特番が生放送された。手書きのフリップや白板を使った手作り感あふれる簡単なセットの中で、視聴者からはがきを読むシンプルな番組。ラジオのDJスタイルの番組は〇六年にスタート、さだの軽妙なトークも魅力で現在はほぼ月一回のペースで全国各地から放送している。ファクスやメール全盛の時代に、投稿ははがき限定の“アナログ流”を貫く。

「メールは一見理路整然としているようでも実は散漫。ファクスもうまくまとまらない。限られたスペースの中で自分が感じた喜怒哀楽を表現するのは、はがきが一番いい。書いている人の体温も伝わってくる」

はがきにこだわる理由をさだはこう話し、「手書きのぬくもりが表現の原点」とも。

今ではバラエティー系の番組で生放送は珍しいが、ライブ感にもこだわる。綿密に時間が区切られ、巧みに編集された番組よりも、つまらない部分も放送するのが「アナログ」。見た目をきれいに揃(そろ)えた「デジタル」とは違って、「アナログ」には何が起るかわからない面白さがあるという。

とはいえ、高画質、高音質などのデジタル化には「逆らうつもりはない」とも。「便利になったけど、デジタルの時代こそアナログが大事だと思う」

多岐にわたる活動を続けているが、自らを「表現者」という。「伝えたいことは、日本人の体温。心は温かいぞ、死んでいないぞ、ということ。これを伝える、作法としてのアナ

ログは永遠になくならない」

さだまさし 1952年生まれ。73年、フォークデュオ、グループでデビュー。76年、ソロに。2010年にはソロコンサート3800回を突破。代表曲に「精霊流し」「関白宣言」「北の国から」など。昨年6月に通算39枚目のアルバム「予感」をリリース。作家としても「解夏」「眉山」などの作品がある。

編集長が展望する 2011 年

地デジ完全移行で、多チャンネル放送も激動の1年に

日経ニューメディア編集長 田中正晴

日経ニューメディア



2010年は、猛烈にデジタルテレビが売れた。その多くは、地上デジタル放送に加え、BS デジタル放送や110度CS デジタル放送も受信できるいわゆる3波共用受信機である。こうした受信機の普及は、地デジ/BS デジタル放送だけではなく、CS やケーブルテレビで展開される多チャンネル放送の行方にも大きな影響を与えている。

3波共用受信機が普及した結果、CS 多チャンネル放送の契約件数が大いに変動している。スカパーJSAT が発表した2010年11月末の数字によると、東経124度/128度CS 放送である「スカパー!」の累計契約件数は約230万、東経110度CS 放送である「スカパー!e2」が約127万である。数だけで言えばまだスカパーの方が圧倒的に多い。しかし、11月末累計契約件数の2005年以降の推移を見ると、スカパー!は323万、323万、310万、284万、254万と減少を続け、2010年は230万となっている。一方のスカパー!e2は20万、31万、47万、72万、102万と増加の一方で2010年は127万になった。

両方を合計すると、ほぼ約350万台で大きな変化はない。しかし、スカパー!の方がチャンネル数が多く、個々の番組供給事業者(番供)を見ると立場は様々だ。特にスカパー!のみで放送していてスカパー!e2で放送されていないチャンネルの番供には深刻な事態である。右肩下がりの中で、いったん赤字に転落すると事業継続が難しくなる。このまま放置しておく、とそろそろ撤退する事業者が相次ぐのではないかと、という見方が広がりだしていた。

CS 放送は体制の見直しへ、激動の一年に

こうした中、スカパーJSAT が行おうとしているのが、スカパー!のH.264への移行である。スカパー!では、従来からのSDTV 放送がMPEG-2で展開されており、2008年10月からH.264によるハイビジョン放送をスタートさせた。動画の符号化技術を最新のH.264に統一し、大規模な多チャンネルハイビジョン放送を展開するとともに、将来的にはSDTV 放送もH.264にそろえようという計画である。

2010年は、スカパー!の将来をどうするのかをめぐり、スカパーJSAT と番供の間で協議が行われてきた。12月現在、既に議論は最終段階まで来ている。ここではH.264 移行に加えて「サービスの魅力を増し加入数減少を食い止めたい」という思いで関係者がそれぞれの立場からの利害を超えて調整を懸命に行っており、協議が整えば2011年の早い段階で一般ユーザーにも魅力的な発表が行われる見通しである。

一方のスカパー!e2 など東経110度の世界では、2010年は新規BS の認定が行われた。2011年は、新規BS への移行によって空く東経110度CS 放送のトラポンを活用した110度CS 放送の高画質化や再編および委託放送事業者の認定が行われる予定である。

既に述べたとおり、スカパー!は減少を続ける一方なので、スカパー!e2 の放送にかかわっていないチャンネルを持つ番供にとっては、110度参入のラストチャンスになるかもしれない今回は見逃す手はないだろう。そのため今年の110度CS 放送の委託放送事業者の認定には希望者が殺到する可能性がある。今回参入を目指す事業者にとっては、110度CS 放送の再編は、高画質化はほどほどにして多チャンネル化が進んでほしいと考える。

一方、新たに 110 度 CS に参入させたいというチャンネルを持たない事業者にとっては再編の目玉は高画質化であり、ハイビジョン放送化を目指す。こうした大きく二つの考えが錯綜する中で、東経 110 度 CS 放送の再編の議論が進む。

ちなみに、新規 BS の委託放送事業者が決まったことを受け、現在は 110 度 CS 放送の引越しに伴って空く帯域の整理案の検討が行われている。空いた周波数に対して、2011 年春以降に委託放送事業者の募集が行われる見通しだが、このとき既存の 110 度 CS 放送事業者も高画質化を目指して手を挙げると見られる。再び引越しに伴い周波数が空くことになる。このため、今年は 110 度 CS 放送について複数回の委託放送事業者の認定が行われそうだ。

ケーブルテレビは地域力で生き残りを図る

3 波共用受信機の普及は、ケーブルテレビの多チャンネル放送の位置づけにも大きく影響する。3 波共用受信機が普及した今、わざわざケーブルを引き込まなくてもいいという話しになりかねない。今後、衛星有料多チャンネル放送の成長の柱であるスカパー!e2 の強化に向けたバックの見直し/追加などの可能性もあり、ますます強いライバルになりそうだ。

ケーブルテレビ事業者は、「テレビ」(地上波再送信/コミュニティチャンネル/多チャンネル放送)に加えて、「電話」と「インターネット」という通信分野に事業領域を拡大し、敷設した回線の利用効率が高まったこともあり、経営体質が強化された。総務省の調査によると、平成 21 年度は 313 社中の 259 社が単年度黒字だったという。

しかし、通信事業者による映像/放送関連ビジネスへの進出から、守勢に回りつつある。「光の道」の激しい議論の末、FTTH の値下げ圧力がますます高まるだろう。その上、テレビサービスの主力の一つである多チャンネル放送が、衛星放送サービスと厳しい競争にさらされることになる。今後は、相当に厳しい時代に入るとは確実だ。

対策は様々講じられようとしている。例えば、「J:COM オン デマンド」の見放題パックなど衛星放送では実現できないサービスの強化は一つの有力な手法だろう。さらには、「地域力」強化である。コミュニティチャンネルの拡充、無線サービス(地域 WiMAX やエリアワンセグ)への進出などいろいろな動きがさらに加速するだろう。地域医療への貢献など、地域に事情に合わせたユニークな取り組みも目白押しである。経営状況が悪化してからだと打てる手も限られるので、ここ数年が「地域力強化」に向けた大事な期間になりそうだ。

地上波、V-High、V-Low・・・

地上波に目を向けると、2011 年は 7 月 24 日にアナログ放送が停波されることになっている。停波の時期をめぐり、様々な動きが出てくるだろう。

筆者としては、以前にも書いたことがあるが、「経済弱者に対する対策を十分に行う(テレビ放送を見続けたいのに経済的な理由で困難な世帯への支援)」「デジタル放送の信号を届ける(放送を見続けたいという意味を持ってテレビを買い換えた世帯はテレビを視聴し続けられるようにする)」という 2 点が重要だと思っている。

2011 年 1 月は、既に重要な時期を通過した。放送普及基本計画によると、「デジタル放送はデジタル放送以外の放送からの全面移行であることから、平成 22 年 12 月までに、デジタル放送以外の放送と同等の地域においてその放送が受信できるようにすること」と記述されている。筆者としては、必ずしも地上波だけでこのことが達成されることにこだわってはいないが、「地上波以外の代替手段も含めて、放送普及基本計画にある趣旨が達成されたのかどうか」「仮に諸般の事情で達成できていない地域があったとすれば、その対応策は行われているのか」が重要だろう。全国にいる読者の皆様の地域では、どのような状況なのだろうか。

そして、アナログ放送の停波の跡地で展開されるのが、V-High 帯あるいは V-Low 帯を利用したいいわゆる「携帯端末向けマルチメディア放送」である。このうち V-High 帯については、マルチメディア放送(mmbi)が ISDB-Tmm 方式による受託放送事業を展開することが決まった。委託放送事業者の選定が来年行われることになるが、参入意向調査によると参入意向を示した事業者の数はそう多くはなく、どのような制度設計になるか気になるとこ

ろだ。なお、委託放送事業者へ番組供給する立場でこの事業への参画を検討している事業者はかなりの数に上ると見られる。

一方のV-Low帯については、「ラジオと地域情報メディアの今後に関する研究会(ラジ研)」の報告書が2010年7月に公表された。V-High帯だけでなくV-Low帯も、多くの国民がテレビを買い換えた結果可能になった地上波デジタル完全移行によって空いた帯域であり、無駄にはできない。2010年12月には民放連による調査結果が公表され、民放ラジオ局のほぼすべての局がV-Low帯の音声優先レーンへの参画を希望していることが報告された。2011年の年明け早々にも、V-Low帯の実用化に向けた具体的な動きが出てくる可能性がありそうだ。

V-Low帯は、単にデジタルラジオ(ラジオ放送のデジタル化)だけには留まらない。携帯電話だけでなく、自動車(車載機)向けや電子書籍端末、タブレット端末向けに地域で利用できる片方向のデータ伝送用汎用パイプに化ける可能性もある。様々なアプリケーションが集まれば汎用パイプに化ける可能性がある。地域で利用できる最後の波になる可能性が高いだけに、「見送るのか、バットを思い切り振るのか」2011年は思案のしどころとなるろう。

このほか、2011年は改正放送法の施行に向けた様々な制度整備の動き、データ放送の活用やインターネットの活用などを含めた新たなビジネスモデルの模索など、放送関連だけでも様々な動きがありそうで、日経ニューメディアという媒体でしっかりウオッチしていきたい。(田中 正晴=日経ニューメディア) [2011/01/07]

「めざまし」に負けた?ズームイン、33年の歴史に幕

夕刊フジ 2011年1月5日

日本テレビ系の朝の看板番組「ズームイン!! SUPER」(月~金曜午前5時20分)が、今年3月で終了することが、分かった。番組の前身「ズームイン!! 朝!」から数えると33年目を迎える長寿番組も地デジ時代へのサバイバルを賭けた視聴率戦争には勝てなかった。

関係者によると、番組スタッフへの発表は4日午前、番組の反省会議で行われたという。「ついにこの日が来たか - という感じで、みんな冷静に受け止めていましたね。昨年12月半ばころから、早朝のオンエアに常に立ち会っていた番組幹部が姿を見せなくなったことから、『いよいよか』という会話が交わされていきましたから」と番組スタッフが明かす。

4日に発表された昨年の年間視聴率(関東地区、ビデオリサーチ調べ)では、ライバルのフジテレビ系「めざましテレビ・2部」が「ズームイン!! SUPER・2部」を上回り、同時間帯トップを維持。これが編成見直しの決定打となったようだ。

番組は2001年10月1日にスタートし、現在は羽鳥慎一(39)、西尾由佳理(33)の両アナウンサーが司会を務める。初代司会者の徳光和夫(69)が「ズームイン!」の掛け声とともにキメるポーズで人気を呼んだ前身の番組から数え、今年3月5日に33年目を迎える。日テレの長寿番組だった。

「一昨年、『めざましテレビ』に年間視聴率で負けて以来、挽回できなかった。昨年3月には、『真相報道 バンキシャ!』などを立ち上げた局のエースを総合演出に迎えてテコ入れ。種をまき、やっと芽が出始めたコーナーもあったのですが...」と局関係者は残念そうだった。

しかし、この間、司会の羽鳥アナをめぐる退社報道などもあり現場には微妙な空気も漂っていた。視聴率が思わしくない上、春には司会者を交代せざるを得ないため、番組そのものを衣替えしてリフレッシュを図ろうという結論に至ったとみられる。

関係者によると、朝から昼にかけての他の番組も含めて、4月には大幅な番組改編が行なわれる見通し。レギュラー陣らを巻き込んだ“春の嵐”が日テレ本社のある汐留に吹き荒れそうだ。

以上